

対「イスラーム国」戦後のスインジャール情勢 ——統治をめぐるイラクの課題——



(一財) 日本エネルギー経済研究所 中東研究センター 主任研究員 吉岡 明子

〈はじめに〉

イラクでは、2017年7月におよそ3年ぶりにモスルを奪還したことによって、ジハード主義組織IS（「イスラーム国」）との戦闘は山場を越えた。まだ複数の小さな町が占拠されているが、焦点はIS後の復興やイラク社会の安定実現に移りつつある。だが、IS後のイラクは、2014年以前と同じではない。個々の町において、誰がテロリストから住民を救ったのか、ということが、ISを放逐した後のその町の統治に死活的に重要な影響を与えている。

そもそもイラクでは、2014年以前も政府による国土の一元的な統治が十分に実現されていなかった。異なる忠誠心を持つ様々な民兵組織や自警団組織が、政府の治安組織と時に協力し、時に競合する形で存在してきたが、その傾向は、ISによる襲撃後、弱い政府がISを掃討するためにあらゆる軍事力を動員する必要に迫られたことによって、さらに強まることとなった。

こうしたIS後の不安定かつ複雑な状況がもっとも顕著に表れている場所の一つが、ニナワ県スインジャールである。住民の多くが、ヤズィード教を信奉するヤズィーディと呼ばれる少数派だという特徴がある。そのため、ISがスインジャールを襲撃した際、彼らを迫害の対象となり得る異教徒と見なし、大勢を殺害ないし奴隷として連れ去ったことで、その人道的悲劇が世界の注目を集めた。2017年5月に町とその一帯はISから解放されたものの、シリア国境に近く、イラクと同様様々な非国家主体が活動するシリアからのアクセスが比較的容易であること、北部のクルド人の自治政府であるKRG（クルディスタン地域政府）とイラク政府との間で帰属が争われている係争地に位置すること、さらにその地理的重要性により国外勢力の介入が生じていることなどから、IS後の情勢は極めて複雑な様相を呈している。以下では、最初にイラクの少数派宗教であるヤズィード教について簡単に説明した上で、このスインジャールという町の特徴や政治的な変遷を踏まえ、現在の状況を整理してIS後のイラクの統治を考える手がかりとしたい。

〈ヤズィード教〉

ヤズィード教とは、ゾロアスター教、マニ教、イスラーム教スーフイズムなどの要素をあわせもつ土着宗教で、その名称は古代イラン語で神を意味するヤサダに由来するとともに、ウマイヤ朝第二代カリフであるヤズィードに由来するとも言われる。イスラームの一派として「ヤズィード派」と呼ばれることもあるが、イスラーム主流派との乖離が大きいことから、ここでは別の宗教として扱う。信徒はイラク北部の他、シリア、ジョージア、アルメニア、イラン北西部などに暮らす。秘教的な性格があり、布教活動は行わず、ヤズィーディはヤズィーディとの間でしか、しかも同じ階層の者としてしか結婚を許されない。日中、定期的に礼拝することやムハンマドを最後の預言者と認識する等、イスラームとの共通点もあるが、輪廻転生を信じる、厳格な宗教階層が存在する、洗礼を受ける、雄牛を生贄に捧げる等様々な違いがある。そして何より、神が創造した世界を管理しているのは孔雀天使（マラク・ターウス）であると信じられており、この孔雀天使像を崇拝することが、問題視されてきた。というのも、ヤズィード教ではしばしば、このマラク・ターウスが大天使アザザエルと同一視されているが、ムスリムにとって、これらの大天使は神に逆らって地獄に落ちた悪魔だと考えられているからである。そのため、多数派のムスリムからはヤズィーディは悪魔崇拝者とのレッテルを貼られ、オスマン帝国末期には大規模な迫害に遭っている。また、ヤズィーディはクルド語（クルマンジ）を話し、イラク建国後は民族面でもクルド人という少数派となったことから、特に旧フセイン政権時代の1970～80年代に苛烈な弾圧を経験した⁽¹⁾。

筆者紹介

1999年大阪外国語大学外国語学部卒。日本エネルギー経済研究所・中東研究センター研究員を経て2013年より現職。2007年にガルフ・リサーチ・センター客員研究員。専門はイラクの現代政治・経済並びにイラクにおけるクルド問題。

〈スインジャール〉

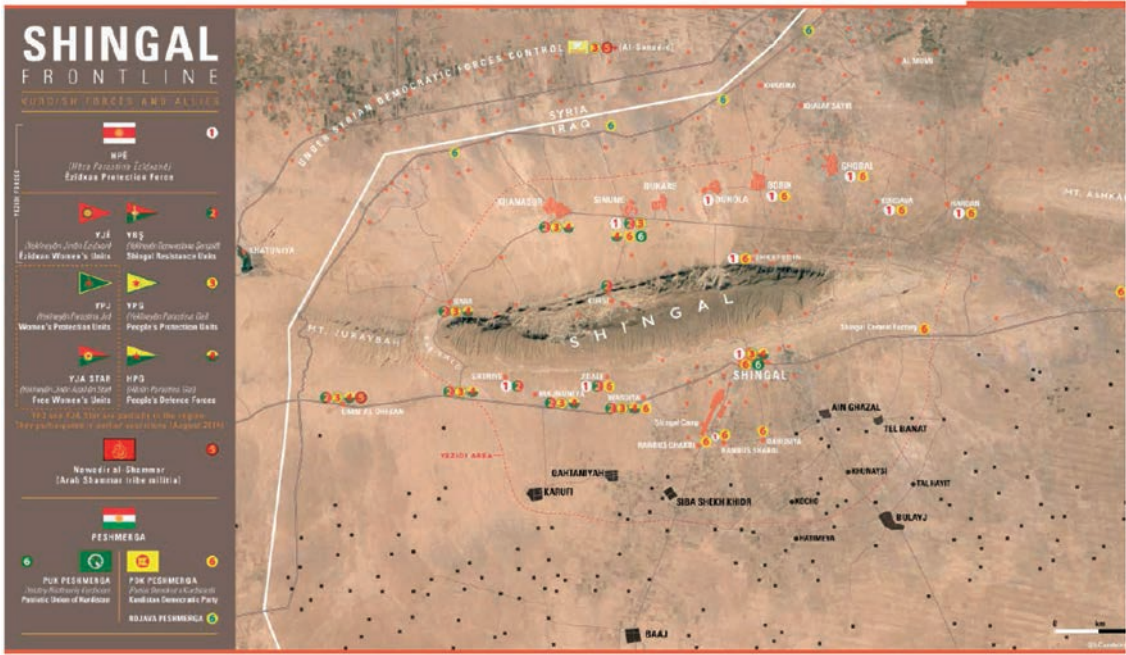
スインジャールは、モスル・シリア間の貿易ルートである47号線沿いに位置し、シリア国境に至るまでのイラク側の最後の町となる。1990年代に北部がクルド人の自治区（クルディスタン地域）になった時にはその範囲内に含まれず、2003年までフセイン政権の支配のもとに置かれていた。現在も行政区としてはニナワ県に属し、行政サービスの支出は基本的にイラク政府が担ってきた。イラク戦争後、KRGはスインジャールの自治区への併合を望んだが、キルクーク県なども含めた係争地全般の帰属問題は解決していない。それゆえ、イラク政府もKRGも将来的な帰属が不確かな係争地に資源をコミットさせることを避ける傾向にあり、復興や経済開発に後れを取っている。

(1) ヤズィード教については以下を参照。ジェラード・ラッセル（白井美子訳）『失われた宗教を生きる人々 中東の秘境を求めて』亜紀書房、2017年；宇野昌樹「ヤズィーディー：孔雀像を崇める人々」松井健・堀内正樹編『講座 世界の先住民族 ファーストピープルの現在 中東編』明石書店、2006年。

多くのヤズィーディは、将来的にクルディスタン地域の一部になるという方針に賛成していたが、中央政府の下でのシンジャール行政を維持することを希望する者も存在した⁽²⁾。一般にムスリムのクルド人の場合、クルドとしての民族アイデンティティが極めて強いが、ヤズィーディは、ヤズィード教という宗教アイデンティティを最も重視する傾向にある。シンジャールの住民は、母語はクルド語だが日常的にアラビア語を使い、言語習得のためにも、しばしばKRGではなくイラク政府が運営するアラビア語の学校を好む傾向にあったという。モスル北部のバシーカなど、クルド語を話さず、モスルやアレッポに近いアラビア語方言を話すヤズィーディもいる⁽³⁾。バグダードのイラク国民議会においては、ヤズィーディは少数派のエスニック集団としてキリスト教徒などと並んで特別議席が割り当てられているが、自治区の議会であるクルディスタン議会においては、彼らはクルド人であるとの認識のもと、ヤズィーディの少数派議席は存在していない。

シンジャールをクルディスタン地域に含むかどうかの帰属問題は解決していないが、2003年のイラク戦争後は、クルディスタン北西部を地盤にする KDP（クルディスタン民主党）が、シンジャールに大きな影響力を持つようになった。KDPは、自党に属さない

シンジャールの勢力地図（2016年6月時点）



Source: Christine van den Toorn, Sarah Mathieu-Comtois and Wladimir Wilgenburg, “Sinjar after ISIS: Returning to Disputed Territory,” PAX, June 2016, pp.18-19.

(2) Matthew Barber, “The KRG Relationship with the Yazidi Minority and the Future of the Yazidis in Shingal,” NRT, Jan 31, 2017.
 (3) Christine van den Toorn, Sarah Mathieu-Comtois and Wladimir Wilgenburg, “Sinjar after ISIS: Returning to Disputed Territory,” PAX, June 2016.

ニナワ県職員をスインジャールから追い出し、また、スインジャール市長など地元の政治的・軍事的要職には党に忠実な人物を任命するなどして、支配を固め地元のヤズイーディに対しても、雇用や安全の提供と引き換えに、時に強権的な手段で支持を取り付けてきた。その結果、当然ながら地元には不満も存在していた。

他方で、2003年のイラク戦争以降はモスル周辺の治安が極度に悪化したこともあり、ヤズイーディ自身、ニナワ県よりもクルディスタン地域の一部である北隣のドホーク県を社会的・経済的なハブとして使うようになった。2000年代半ばから後半にかけては、モスル大学に在学していた多くの学生が KRG から居住許可を得て、ドホーク大学やエルビル県のサラハッディーン大学に移っていった⁽⁴⁾。また、タルアファルやバアージといった、スンナ派の過激派武装勢力の拠点に近いスインジャールでは、地元からのリクルートを中心としたイラク軍第3師団が展開していたとはいえ、KDP のペシュメルガ（クルド治安部隊）による保護が不可欠だったという事情もある⁽⁵⁾。実際に2007年8月には、ヤズイーディを狙った大規模テロがスインジャールから南に数kmの町カフターニーヤで発生し、500名を超える死者を出す大惨事が発生している。

このように、2014年に IS に占拠されるまでのスインジャールでは、イラク政府やニナワ県が徐々にスインジャールのコントロールを失いつつあり、KRG とりわけその与党であり隣接するドホーク県やエルビル県に基盤を持つ KDP が、支配を確立していった。だが、雇用や安全の提供と引き換えに党への忠誠が求められる状況が、地元のヤズイーディに必ずしも歓迎されていたわけではなかった。

〈IS の襲撃とその後の展開〉

こうした状況下で、2014年8月3日、およそ2ヵ月前にモスルを陥落させていた IS がスインジャールへ攻め込んだ。異教徒であるヤズイーディにとって、キリスト教徒やユダヤ教徒のように税金を支払うといった一定の制約を受け入れて IS の支配下で生きるという選択肢はなく、逃げるか殺害されるか奴隷として連れていかれるかのいずれかであった。KRG ワクフ宗教問題省の発表によると、IS に殺害された人数は1,293名⁽⁶⁾、加えて6,417名（うち女性1,102名、子ども1,655名）が拉致された。スインジャールの人口36万人のほぼ全員が避難を余儀なくされ、半分の18万人はクルディスタン地域に、さらに9万人が国外に逃れた⁽⁷⁾。

(4) *ibid.*

(5) Michael Knights, “Turkey’s Waiting Game in Sinjar,” *Turkey Scope*, June 2017.

(6) ただし、国際 NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチは殺害された人数を2,000~5,000名と見積もっている (Human Rights Watch, “Iraq: KRG Restrictions Harm Yezidi Recovery,” Dec 04, 2016; *Iraqi News*, Aug 03, 2017)。

(7) *Iraqi News*, Aug 03, 2017.

このISの襲撃に対して、ペシュメルガがスインジャール防衛を早々に諦めて撤退したこと、そこに助けに入ったのがトルコやシリアのクルド勢力であったこと、そして最近になってスインジャールの町の南部が完全に解放されたが、それを担ったのがハシュド・シャアビ（人民動員部隊。シーア派民兵を核とするイラク政府傘下の治安部隊）であったことから、スインジャール情勢は極めて複雑な様相を呈するようになった。

時系列でスインジャール情勢を振り返ると、まず、2014年8月のISの襲撃に際して、ヤズィーディの悲劇が世界的な注目を集めたことを一因として、2011年末にイラクから撤退していた米軍が空爆に踏み切り、イラクでの軍事活動を再開するきっかけとなった。同時に、トルコで反政府武装活動を続けるクルド組織 PKK（クルディスタン労働者党）や、その姉妹組織で、シリア北部に支配領域を持つ YPG（人民防衛部隊）が、国境を越えてスインジャールに展開し、ヤズィーディの救出を支援した。そして PKK/YPG は、その後もスインジャールで影響力を維持し、YBS（スインジャール抵抗部隊）を組織している。

その後、同年12月に KRG のペシュメルガが米軍の空爆支援を得て、スインジャール山を解放したが、山の南側にあるスインジャールの町の解放に至るまでそこから約1年の時間を要したのは、KDP と PKK との間の調整が難航したためだとみられている。2015年11月に解放後のスインジャールの町でスピーチを行ったバルザーニ KRG 大統領は、軍事攻撃がペシュメルガによる作戦だったことを強調したが、実際には解放後のスインジャールには YBS など他の部隊も展開している。

そうした中、2017年3月にはスインジャール山の北部で、KDP が支援するシリア・クルド人組織ロジャヴァ・ペシュメルガと、YBS が軍事衝突する事態が発生した。さらに2017年4月、PKK のさらなる勢力拡大を懸念するトルコがスインジャールへの空爆にも踏み切った。

町の解放後も、スインジャール地方のうち南部はISの支配が続いていたが、それらも最

スインジャール情勢の推移

2014年8月	IS 侵攻でスインジャール陥落, YPG/PKK が介入
2014年12月	スインジャール山を解放
2015年11月	スインジャールの町を解放
2016年10月	モスル戦開始 (2017年7月終結)
2017年3月	ロジャヴァ・ペシュメルガと YBS が戦闘, 4名死亡
2017年4月	トルコがスインジャールを空爆
2017年5月	スインジャールの南部をハシュドが解放

出所：各種資料をもとに筆者作成

最終的に2017年5月に解放された。ただし、この南部の解放作戦を主導したのはクルド系の勢力ではなかった。シーア派民兵を中心とするハシュドが、イラク政府のアバーディ首相の承認のもとで軍事作戦を主導し、その中には、ヤズイーディ・ハシュドと呼ばれる地元兵士も含まれていた。

〈影響力をめぐる争い〉

このように、スインジャーに影響力をもつアクターは数多いが、大別すると、①イラク・クルディスタン地域を拠点とする勢力、②イラク国外のクルド勢力、③イラク政府系の勢力となる。

① イラク・クルディスタン地域を拠点とする勢力

従来からスインジャーで影響力を誇ってきたのはKRGであり、その中でもとりわけKDPだった。2014年のISによる侵攻時にヤズイーディを守れなかったことでその影響力には変化がみられるが、今も中心的な勢力の一つであることには変わりない。2014年以降に生じた具体的な変化は、KDP所属のカーシム・シャショがスインジャーのヤズイーディ・ペシュメルガを率いるようになったことである。カーシム自身がスインジャー出身で、彼の部隊はKDPに所属してはいるが、事実上、私兵のような形になっている。また、彼らの装備は、クルディスタン地域内のペシュメルガのそれと比べて劣ることが指摘されており、地元では、KDPはヤズイーディを信用していないのではないかとの声もあるという⁽⁸⁾。

他に、カーシムの甥で元PUKのハイダル・シャショも、2014年以降PUKを離れて独自のヤズイーディの民兵HPE（ヤズイーディ保護部隊）を組織している。スインジャーを舞台に勢力争いを繰り広げるKDPとPKKのどちらにも属さない、第三の道を目指す層に人気を得たと言われる。2014年11月にはイラク政府との間で、HPEがハシュドに参加することで1,000名分の給与を得るという合意を結んだ。ハシュドの中核はシーア派民兵だが、イラク政府はスンナ派や他の少数派も取り込むことで、シーア派色を薄めてイラクを代表する組織にしたいという意向がある。しかし、3ヵ月分でおおよそ220万ドルにのぼるこの給与収入の少なくとも半分を、ハイダルとその副官が着服していた疑いがもたれており、さらに、2015年4月にはハイダルがドホークの親戚を訪れた際にKDPに身柄を拘束され、ハシュドから抜けることとなり、イラク政府からの資金援助は止まった。ハイダルはKDPに接近し、最終的に2017年3月にHPEは、KRGペシュメルガ省のもとでゆ

(8) Matthew Barber, "Political Competition and the Resolution of the Sinjar Crisis," Yazda, May 01, 2016.

るやかに統合されることになった。

さらに、KDPはシリアのクルド地域から逃れてきたクルド人をリクルートして、ロジャヴァ・ペシュメルガを組織している⁽⁹⁾。現在のシリアのクルド地域はYPGが統治しており、彼らはライバル勢力となるロジャヴァ・ペシュメルガの帰還を許していない。そのため、ロジャヴァ・ペシュメルガはシリア国境に近いスインジャール近郊に展開しているが、2017年3月には、YBSが拠点をおく村に入ろうとしたところで軍事衝突に発展した。KDPは通常の部隊移動の一環だったと主張する一方、PKKはトルコが同盟関係にあるKDPを通じて圧力をかけようとしていると疑っている。衝突は短時間で終息したものの、47名の死者を出す惨事となった。

② 国外のクルド勢力

PKKはトルコで反政府武装闘争を行う国外勢力ではあるが、特に1990年代以降は、自治区となったイラク・クルディスタン地域への一定のアクセスを確保し、山間部に拠点をおいてきた。トルコ国境地帯を支配するKDPは、PKKの勢力拡張を警戒しつつも、同じクルド人同士の軍事衝突は市民の間で忌避感が強いため、できるだけ避ける傾向にある。

2013年のトルコ政府とPKKとの和平交渉では、PKKがイラク・クルディスタンに撤退して武装解除することが合意された。しかし、イラク・クルディスタンは2014年夏からISの攻撃を受け、一部では総崩れになったペシュメルガに代わってPKKが前線で活躍することになった。これは、武装解除とは真逆の動きだとしてトルコ政府の反発を招き、和平交渉が2015年に決裂する一因となった。PKKは国境にとらわれない汎クルド主義をそのイデオロギーとしているが、それによってイラク国内の支持基盤を荒らされることになるKDPが反発していることは承知しており、スインジャールでは徐々に地元組織YBSに権限を委譲している模様である。

YBSを構成するヤズイーディは、必ずしもPKKの汎クルド主義イデオロギーを支持しているわけではなく、自警団として、あるいはKDPに対抗できる組織として、YBSに参加しているとみられる。だが、KDPはこうした新たな勢力の出現に神経をとがらせており、対スインジャール支援が対YBS支援につながることを恐れて、2016年から2017年5月頃までスインジャール一帯を経済封鎖していた。しばしば援助団体が検問所で援助物資の搬入を止められ、ニナワ県の書類があってもドホーク県の書類がないことを理由に医薬品の搬入を拒否されるといった事態が生じていた。現在は封鎖が解除された模様だが、その理由は、2017年5月にスインジャール南部がハシュドによって解放され、物資輸送ルートをKDPが独占できなくなったためではないかと考えられる。また、KDPはYBSのメ

(9) ロジャヴァは西を意味し、シリアのクルド地域を指す。

ンバーがクルディスタン地域内のキャンプの親戚などを訪れた際に逮捕するなどして圧力をかけている。

イラク政府は、対IS戦の過程で支配領域を拡張するKRGに懸念を強めており、特にKDPへの牽制の意味合いで、YBSを2015年8月にハシュドの一組織として登録し、給与の支払いを始めた。なお、当時はスインジャール南部やモスルー帯をISが支配しており、ペシュメルガの支配領域を通らずにバグダードからスインジャールにアクセスができなかったため、武器の供与はなされなかった⁽¹⁰⁾。ただし、2016年10月からモスル奪還作戦を実施するにあたり、イラク政府はKRGの協力を得る必要があり、KRGの要請によってYBSへの給与支払いは停止された。これにはトルコ政府からの圧力もあったとみられる⁽¹¹⁾。

③ イラク政府系の勢力

イラク政府の正規治安部隊としては、連邦警察がスインジャールに展開している。しかし、ヤズィーディ・ペシュメルガやHPE、YBSなど主要な部隊の兵力がそれぞれ数千人規模であるのに対し、連邦警察は数十人規模と極めて小規模で、影響力も小さい。

他方で、より大きなプレゼンスを示しているのがハシュドである。2017年5月の軍事作戦で、モスル西部からシリア国境に向けて進軍し、タルアファル西方や、スインジャール南方、シリア国境に近いバアージなどを解放した。これにより、スインジャール地区一帯は2014年8月以来初めて、完全にISから解放されたことになった。ハシュドには様々な勢力が参加しているが、今回の作戦の中核となったのは、バドル組織とヒズブッラ旅団であり、これに加えて、1,000名規模の地元民からなるヤズィーディ・ハシュドが参加した。

2015年11月にペシュメルガがスインジャールの町を解放したが、その際、町の南側の前線を、IS支配地域からの迫撃砲が届かない距離まで拡張しなかったため、町はその後ISからの攻撃を受け続け、住民は帰還できないままだった。町の南部には、ヤズィーディの村が点在していたが、当時KDPは、スインジャールの町やその南部の村に避難民が大勢帰還することによって、ますますPKKやYBSが支持を広げ、ヤズィーディへの影響力を喪失する事態を恐れ、あえて南部の解放には動かなかったという事情がある⁽¹²⁾。他方、YBSには単独で解放できるだけの軍事力がなかった。

こうした状況に不満を持つヤズィーディの一部が、ヤズィーディ・ペシュメルガやYBSを抜けて、ハシュドに流れていったとみられている。KDPはハシュドをシーア派の軍事力

(10) Barber, op.cit., 2016.

(11) Wladimir van Wilgenburg, “PKK resents Shia paramilitary presence in Yazidi region of Sinjar,” ARA News, Jun 08, 2017. ただし、2017年5月には再開されたとの報道もあり、詳細は不明。

(12) Matthew Barber, “The End of the PKK in Sinjar? How the Hashd al-Sha’bi Can Help Resolve the Yazidi Genocide,” NRT, May 30, 2017.

の拡張と捉えて警戒するが、ヤズィーディは、かつてイラク軍・警察、国境警備隊などに参加していた者もあり、ハシュドをそれほどネガティブにはとらえていない模様である⁽¹³⁾。ハシュドに参加しているヤズィーディの部隊として、ナイフ・ジャッソ率いるコチョ連隊、ハル・アリ率いるラリシュ連隊などがあり、それぞれ数百名規模と見られる⁽¹⁴⁾。

〈おわりに〉

KRGは2017年9月25日に独立を問う住民投票を行うと発表しており、その投票が行われる場所として、スインジャールも含まれることが想定されている。むろん、住民投票の実施が実際の独立国家の樹立にすぐに繋がることはないが、多くの住民が投票に参加すれば、スインジャールの将来の一つの方向性として、クルディスタンの一部となることが示されることになる。他方で、8月20日にYBSの政治組織が、スインジャールにKRG、PKK、シリアのクルド勢力などが監督する形で自治区を立ち上げるという構想を発表した⁽¹⁵⁾。これは実現の可能性が極めて低いものの、PKKの汎クルド主義を意識した動きであり、KDPのスインジャール支配やKRGの独立国家樹立への動きへの対抗とみることができよう。こうした既存の政治勢力がそれぞれの思惑でスインジャールへの介入と統治を模索する状況は、今後も続くと思われる。

他方、スインジャールの地元住民としては、2014年以前からアラブ人やムスリムのクルド人から差別されてきたという思いや、ISによる苛酷な迫害を経て、ヤズィーディ自身による自治を求める声が強まっている。しかしながら、それが、どのような形としての自治なのか、その地方行政がクルドとの関係において、あるいはイラク国家の中で、どのように位置づけられるのか等、議論は収斂していない。自治のあり方の選択肢として、ニナワ県から分離して別の県になる、といった案もあるものの、現実には、そうした法的手続きを要する行政区画の変更に取り組むだけの余裕が、今のイラク政府には乏しい。これまで、ハシュドの枠組みを利用したヤズィーディの取り込みが、2014～2015年にHPE、2015～2016年にYBS、そして2017年にはヤズィーディ・ハシュドへと移り変わっていったことから見て取れるように、イラク政府がスインジャール統治に明確な政策を持っているわけではなく、また、そうした政策を実現できるだけの実行力を欠いているのが現実である。

一定の領域における統治や行政が、法律や行政令などの公的な枠組みの影響を受けつつ

(13) Joel Wing, "Sinjar Dispute Between the Hashd and Kurdistan Democratic Party: Interview with Journalist Wladimir van Wilgenburg," *Musing on Iraq*, Jun 20, 2017.

(14) Bradley Brincka, "Yazidi PMU Fighters Face Uncertainty in the KRG," *1001 Iraqi Thoughts*, Aug 22, 2017.

(15) ANF News, Aug 20, 2017.

も、現場を実効支配する政治・軍事勢力によって既成事実化されているのがスインジャーの現状である。そこには政治・軍事情勢次第で力関係が変化するという流動性と、必ずしも地元の明確な支持を背景にしていけないという不安定性が存在する。これは、これまでにIS支配を脱したイラクの他の町においても、これほど複雑ではないとはいえ、共通して見られる傾向である。IS戦後のイラクは、こうした細分化された脆弱な統治という、大きな課題を抱えている。

* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。